

「コーヒーと本の街」と各方面から注目を集めるほどに謳われる街、盛岡。言い得て妙。この言葉が表すように、独自の拘りと情熱を持ったお店が街の至るところで営み励んでいらっしゃいます。これまで長きにわたり、珈琲と本がこの街の生活へ根付く活動をしてこられた「ネルドリップ珈琲 機屋」代表 関 基尋さん、「さわや書店」営業部長の栗澤 順一さんにお集まりいただき、「コーヒーと本」をテーマにしなが、洞察力→思考力→想像力を養うことを弛まらず続けるための字引書的なお話を、滋味溢れるコーヒーを嗜みながら、尽きることない話に花を咲かせたのです。「“文化的な消費”の豊かな都市が発展する」。人の活動こそが、街の文化度を定めるのではないのでしょうか。ハイ、確かに新しい文化はこの街に芽吹きつつあると思うのです。いろいろ沢山あるけれど「ピンチはチャンス」と捉え、旧正月を迎えた2021年2月、本年が皆様にとって幸多き年となりますようお祈り申し上げます。

< 対談者プロフィール >

関 基尋さん

株式会社機屋代表取締役。

【珈琲】に魅せられて早30年。事の始まりは高校の同期の友人に誘われて東京吉祥寺の珈琲店から。

そして今は幼馴染の三田君のお母屋をお借りして珈琲店を営業。

人と人の奇妙な縁に翻弄しながら、いや感謝しながら日々を楽しんでいます。

栗澤 順一さん

株式会社さわや書店外商部兼商品管理部部長。

教科書販売から各種出張販売、また講演会やイベント業務の他に各店巡回と忙しく駆け回っています。

街で見かけたら声をかけてやって下さい。趣味は深酒。

三田 林太郎さん

三田農林株式会社 代表取締役社長・クロステラス盛岡

今読んでいる本はスウェーデン人の精神科医アンデシュ・ハンセンの「スマホ脳」。

ステイブジョブスは我が子にiPadを触らせなかったのはなぜか？

珈琲にはこだわりはないが、2012年にスマトラ島の山奥の珈琲農家の家に数日ご厄介に。

夜中の水浴びは辛かったが新鮮なマンデリンのほろ苦さは最高だった。

橋野 浩樹さん

三田農林株式会社 総務・クロステラス盛岡 販促担当

自分以外の家族全員本の虫で、その影響が小中高時代国語の成績だけは非常に良かった。

金野 大介さん

Heg. 主宰 「ポジティ部」「クリエイティ部」 主将。

レヴィ=ストロースの思考に触れながら独自の解釈で世界を読む内田樹さんの書物を貪り読み込む。今こそ身体センサー発動せよ。

数あるビジネス書に解を求めるくらいなら「サラリーマン金太郎」「花の慶次」で義を学ぶ。(お勧めですよ)

もはや珈琲はわたしを存在化するために必要不可欠な要素と言っても過言ではないくらいお世話になっております。

宮本 拓海さん

フリーランス/企画・編集・執筆

1994年生まれ。岩手県奥州市出身。2019年よりフリーランスとして活動中。

橋野 クロストークは今回で4回目になります。このコロナ禍、盛岡のまちなかエリアを中心にご商売されている方々を招いて、世の中の現状に対して、どのような取り組みをされているのか、みなさまが考えていらっしゃることをたくさん本音で話し合っただけだったらいいなと思ってやっている企画です。

金野 それではまず最初にそれぞれの会社のご紹介をいただけたらと思います。よろしくお願ひします。

関 本町通りで、1994年に始めたので、今年でかれこれ27年目ですね。うちの親のお店を引き継いで始めたお店で、長期熟成オールドコーヒーの店 機屋と言います。僕自身、学生時代は東京で過ごしていたんですが、オールドコーヒーに魅せられて大学にも行かず、コーヒー屋ばかり巡るという生活をしていて、卒業するのに半年多くかかりました。なんとか卒業しているんですけど、その後4年くらいはそのまま東京で働いて、コーヒー屋さんのノウハウを身に付けて、盛岡で店を始めました。当初はまったくお客さんもこなかったです。1日ひとりか、ふたりくらい。

三田 そうですよ。

関 全然こない。自分は当時人間として、かなり尖っていたんですね。「好きにやりたい」という感じで。お客さんを迎合した形はまったく取らず、当時はずっとデミタスコffeeっていうネルドリップで点てる濃いめのコーヒーがとにかく一番うまいコーヒーだと思っていたので、そういうことを20代後半の若造の僕が言っても、お客さんからは「そんな量でいいの？」とか、ぬるめのコーヒーを出していたりすると「こんなにぬるいのはだめだ」と言われて、すごい喧嘩してましたよ。喧嘩というか、今で言えば、クレームをたくさん受けていました(笑)。